南山８号、９号窯の覆屋（古窯館）の建設内容

学　芸　課

1. 経過

平成2年12月から始まった愛知県陶磁資料館増築工事に際して、新駐車場予定地に発見されていた２基の古窯跡は、翌３年１月から３月にかけて発掘調査されたが、実際には５基の古窯跡が存在したことが明らかにされた。その内容は、平安時代後期の11世紀代の灰釉陶器生産窯から鎌倉時代後期13世紀末の山茶碗生産窯までの、３世紀に渡る歴史的な移り変わりをよく物語るものであり、しかもこの古窯跡のうち２基（南山９Ａ、９Ｂ）は、天井部がほぼ残存し、古窯跡の内部構造全体がよく把握できるものであることが判明した。この南山８号窯および９Ａ～９Ｄ号窯の５基の古窯跡については、その貴重性と文化財の活用の面から、駐車場の設計を変更して保存することとなり、平成４年１月に保存工事が行われた。そして平成４年度には、新たな建築工事として覆屋が２棟、南山８号窯棟と南山９号窯棟として建設された。

この覆屋は「古窯館」と呼称し、愛知県陶磁資料館の屋外展示施設として活用をはかっているもので、古代から中世の陶器生産の現場そのものが実見できる、まさに生きた古窯跡の保存と実物展示である。展示館である本館、南館、西館での企画展や常設展での、原始時代から現代までの陶磁器の歴史的な展開や優れた芸術品の鑑賞の前に、あるいは鑑賞後に、その生産の場を実際に見学していただくべく回遊して見学できるように設計され、駐車場からのアプローチも容易にしてある。

ところで、古窯跡の発掘調査結果については、『瀬戸市南山口町・愛知県陶磁資料館駐車場予定地内　南山８号・９－Ａ～Ｄ号窯発掘調査報告』（愛知県陶磁資料館　1991.3）として刊行し、古窯跡の保存工事の内容については、柴垣勇夫・野末浩之「〈古窯保存処理〉南山８、９－Ａ、９－Ｂ号窯保存工事のあらまし」（『愛知県陶磁資料館研究紀要11』1992）として紹介したところであるが、展示施設としての建築物については、これまで公表することがなかった。しかし、見学できる回遊路と湿気を排除する保存方法が現在もうまく活動していることから、古窯跡の保存と活用面で、地方公共団体の文化財保護担当者の見学や、関係者からの問い合わせも多いことにかんがみ、覆屋（「古窯館」）の建設内容を以下に記すこととする。

なお、平成４年度の工事名称は、予算上「陶磁資料館古窯上屋等建設工事」と称し、建物周囲の環境整備を含めて、総工費約6,600万円であった。また保存工事は約500万円であった。

2. 古窯館の位置と規模

(1) 南山８号窯棟（古窯館１）

南山８号窯は、窯体規模が焼成室床面で最大巾2.4ｍ、残存長さ約６ｍ、焚き口前面にピットなどがあり、これらを含めて外法巾6.4ｍ、外法長さ11.7ｍの駆体に屋根の飛び出しが南北側で1.1ｍずつ2.2ｍ、東西（上下）側で0.83ｍずつ約1.7ｍある建物で、建築面積は、74.61㎡の規模である。また、床面積は、72.05㎡である。

駐車場の西側進入路の中央やや南側にあって、１基のみの単独の覆屋として建設された。

窯体の高低差が約 2.5 m あるため、図 2、図 4 にみる古窯館 1 の東側立面図の桁高は 5.6 m、棟の最高所までは約 7.5 m、西側立面図の桁高は 3.2 m、棟の最高所までは約 4.9 m である。

(2) 南山 9 号窯棟（古窯館 2）

南山 9 号窯の方は、A～D まで 4 基検出されたため、その全体を覆う必要から、構造的には大規模なものとなった。南山 9 A 号窯の例で窯体の規模をみると、焼成室床面での最大巾 2.6 m、全長 7.5 m あり、焚き口と煙道部までの高低差は 3.8 m あった。4 基の窯を含める範囲としては南北巾で約13 m、窯前ピットを含めて東西長で約14.5 m が必要となり、これに回遊見学路を設けることから、外法巾16.5 m、外法長さ17.4 m の駆体に屋根の飛び出しが南北側で 1.4 m ずつ 2.8 m、東西（上下）側で0.76 m ずつ約 1.5 m ある建物となった。建築面積は286.28㎡で、床面積は271.95㎡である。

8 号窯棟とは建物東側で14.5 m 離れており、この間を植栽して芝張りしている。9 号窯棟の南側で駐車場との高低差が 3.6 m あり、駐車場からは直接に階段で下がり 9 号窯棟、8 号窯棟へ入るようになっている。図 2、図 4 にみる如く古窯館 2 の南側立面図の桁高は 6.8 m、棟の最高所まで約10 m、北側立面図の桁高は 3.2 m、棟の最高所までは約 6.8 m である。

9 号窯棟の上段と下段の見学路の高低差は 3.6 m を用意し、窯体全体を上位からと焚き口前からと両方から見学できるよう回遊路が設定してある。なお、8 号窯の下段見学位置と 9 号窯の下段見学位置は、窯体の位置関係から、8 号窯の方が 1.2 m 高位にある。また、上段の見学路は、同一レベルで、海抜 136.5 m の標高位である。

3. 古窯館の構造

8 号窯棟、9 号窯棟ともに、鉄筋コンクリート造りで、外部仕上げ、内部仕上げは、以下の表の如くである。

なお、設計は、本館棟等と同じ「株式会社山下設計」である。

表 1　外部仕上表　（8、9 号窯棟共通）

部位		仕上	備考
屋根	屋根 霜除け	カラー樹脂鋼板　T＝0.4　横段葺工法（30 分耐火構造）	下地 野地板 不毛パーライトセメント板 T＝25 （耐火 R 0114） ＋アスファルト・ルーフィング 22 kg
		棟包み、軒先包み　けらば、けらば包み　カラー樹脂鋼板　T＝0.6 加工	
	軒天	硅酸カルシウム板　T＝6.0　外装薄塗材 E 吹付	目透し張り
壁	幅木 （腰）	コンクリート化粧打放し	化粧目地 W＝25　@ 3,000
	壁	ALC 版　T＝50　外装薄塗材 E 吹付	
樋	軒樋	塩ビ製　既製品	120 角型
	竪樋	塩ビ製　15φ	
建具	出入口	アルミ製　アルマイト仕上	
	窓	アルミ製　アルマイト仕上	
ガラス		フロートガラス　T＝5.0～T＝6.0	
		型ガラス　T＝4.0　　縁入型ガラス　T＝6.8	
		10×10 メッシュ金網亜鉛メッキ	
その他	散策路	砂利敷　階段部分－疑木丸太	
	案内板	ステンレス製	
	擁壁	コンクリート化粧打放し（特殊型枠）	石積模様
	アプローチ	物見台　床　磁器質床用タイル 100 × 200　手摺　スチール製	
		階段　磁器質床用タイル 100 × 200　ノンスリップタイル　手摺　スチール製	

表 2　内部仕上表

室名	8号窯室、9号窯室共通
床	散策路　たたき土間　一部磁器質床用タイル 100×200 貼り（散策路外は現況のままとする。）
幅木腰	コンクリート化粧打放し（化粧目地 W＝25　@1,200）
壁	ALC版 T＝50 表わし　外装薄塗材 E 吹付（胴縁鉄骨部は SOP）
天　井	野地板表わし
備考	手摺　スチール製　SOP 階段　コンクリート製モルタル金ゴテ　ノンスリップタイル

4. 古窯跡周辺の集水マスと排水

古窯跡発掘当時は、西側斜面の雨水と丘陵中の粘土層の関係から、古窯跡床面が、8号窯跡、9号窯跡とも湿気を持ち、苔が生えている状態が続いた。ただ駐車場の北半部は、調整池の性格をもったボックスカルバートが建設されるため、それぞれの古窯跡の最下部に集水マスを設置し、ここから直径 300 ミリのカナパイプの排水管をのべ 76 m、ボックスカルバート建設地内の集水マスまで配置し、ボックスカルバート完成時にこれへ通管するようにした。従って古窯館建設とともにボックスカルバートも完成し、集水マスは、有効に機能するようになった。同時に、窯体上部には、排水路をもった駐車場への進入路が、古窯館上段見学路より－ 0.8 m の高さで建設されたため、古窯館への雨水の浸み込みはなくなった。それでも覆屋建設時 1 年間は湿気が目立ったが、現在では非常に良好な状態で古窯跡本体の保存がなされている。

（文責　柴垣勇夫）

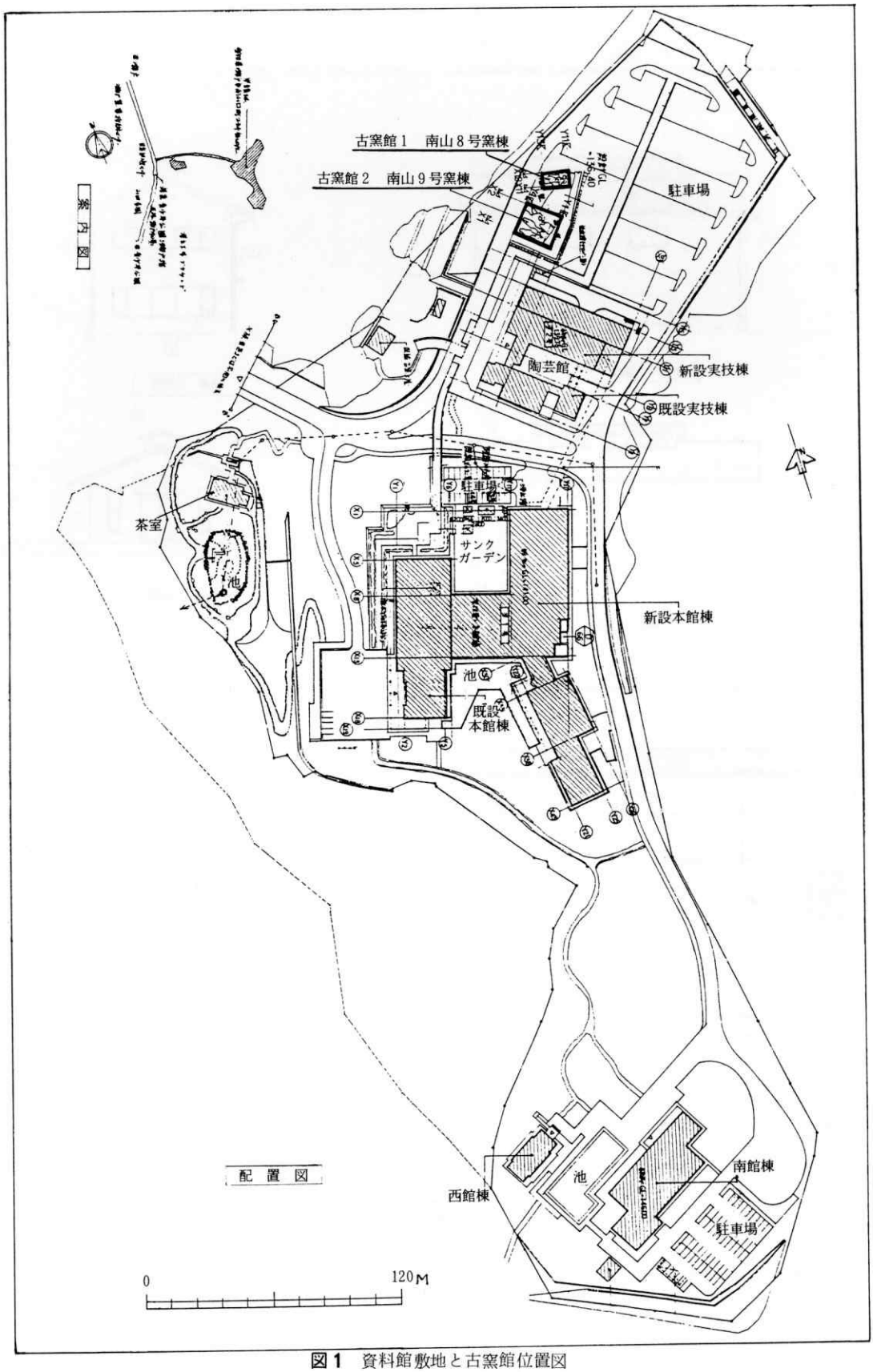


図1　資料館敷地と古窯館位置図

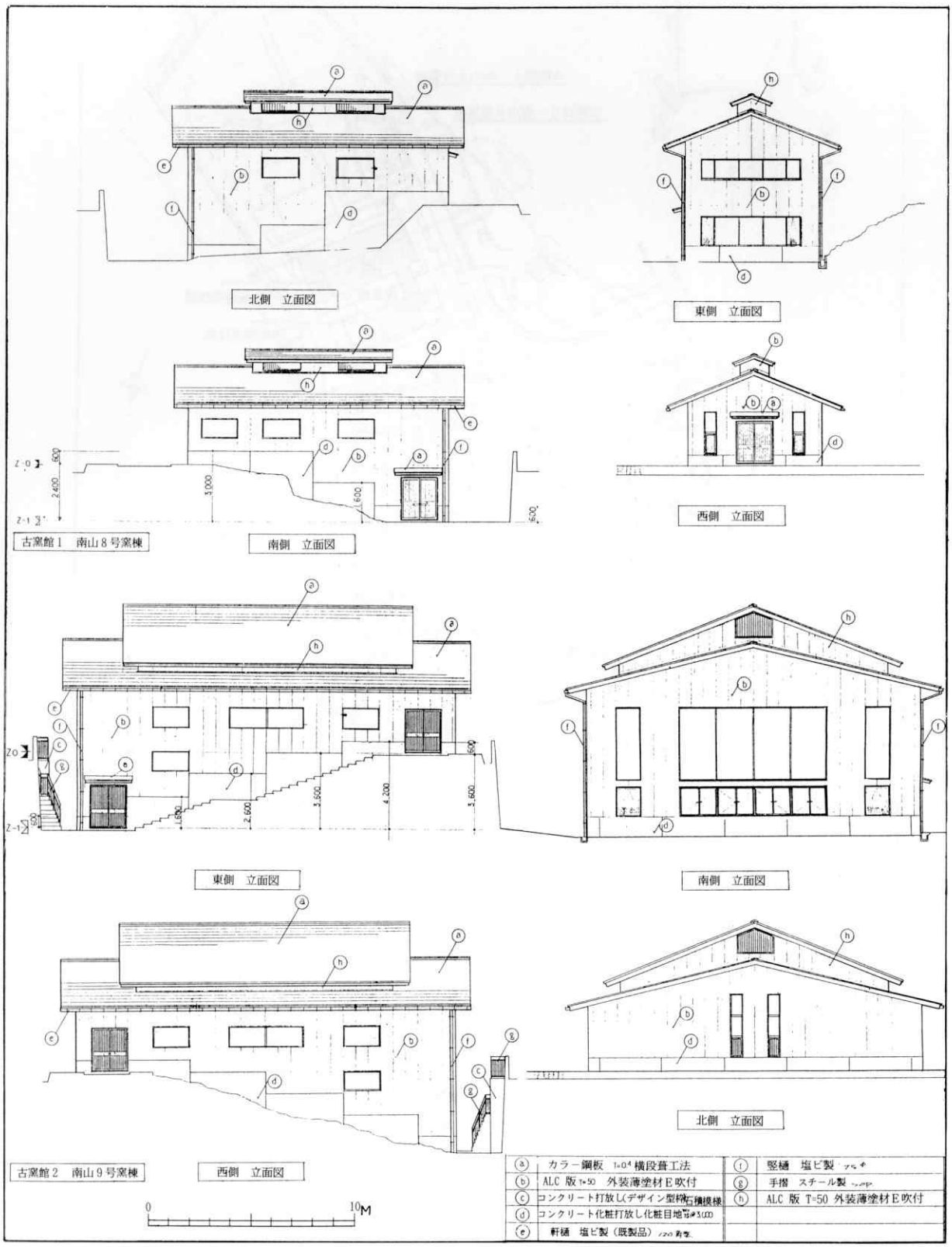

北側 立面図
東側 立面図
南側 立面図
西側 立面図
古窯館1 南山8号窯棟
東側 立面図
南側 立面図
北側 立面図
古窯館2 南山9号窯棟
西側 立面図
0
10M
ⓐ カラー鋼板 t=0.4 横段葺工法
ⓑ ALC 版 t=50 外装薄塗材E吹付
ⓒ コンクリート打放し(デザイン型枠石積模様)
ⓓ コンクリート化粧打放し化粧目地
ⓔ 軒樋 塩ビ製(既製品)
ⓕ 竪樋 塩ビ製
ⓖ 手摺 スチール製
ⓗ ALC 版 T=50 外装薄塗材E吹付

図2 古窯館外観図

① 南山8、9号窯発掘調査時風景(左：南山9号窯、右端：8号窯)東から

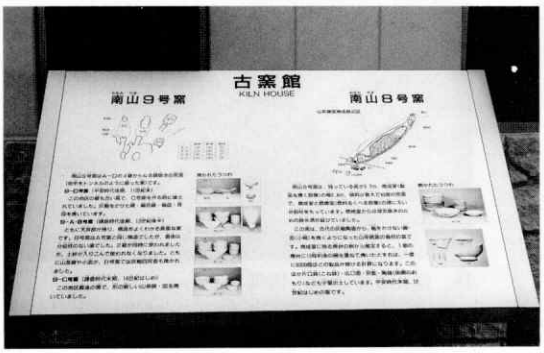
⑤ 古窯館現況 手前：南山9号窯 奥：南山8号窯南から

② 古窯館建設工事時(東から)左：南山9号窯 右：南山8号窯

⑥ 古窯館現況 西から

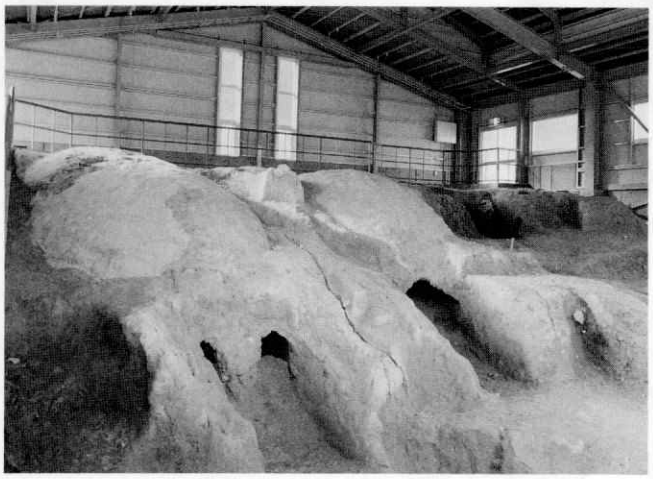
③ 古窯館現況 手前が大駐車場

⑦ 古窯館南山9号窯棟北側植栽



④ 古窯館大駐車場前説明板

⑧ 南山8号窯 館内説明板



⑨　南山9号窯棟　内部下から

⑩　南山9号窯　館内説明板

⑪　南山9号窯棟　内部上から

⑫　南山8号窯棟　建設時外観

⑬　南山8号窯棟　内部下から

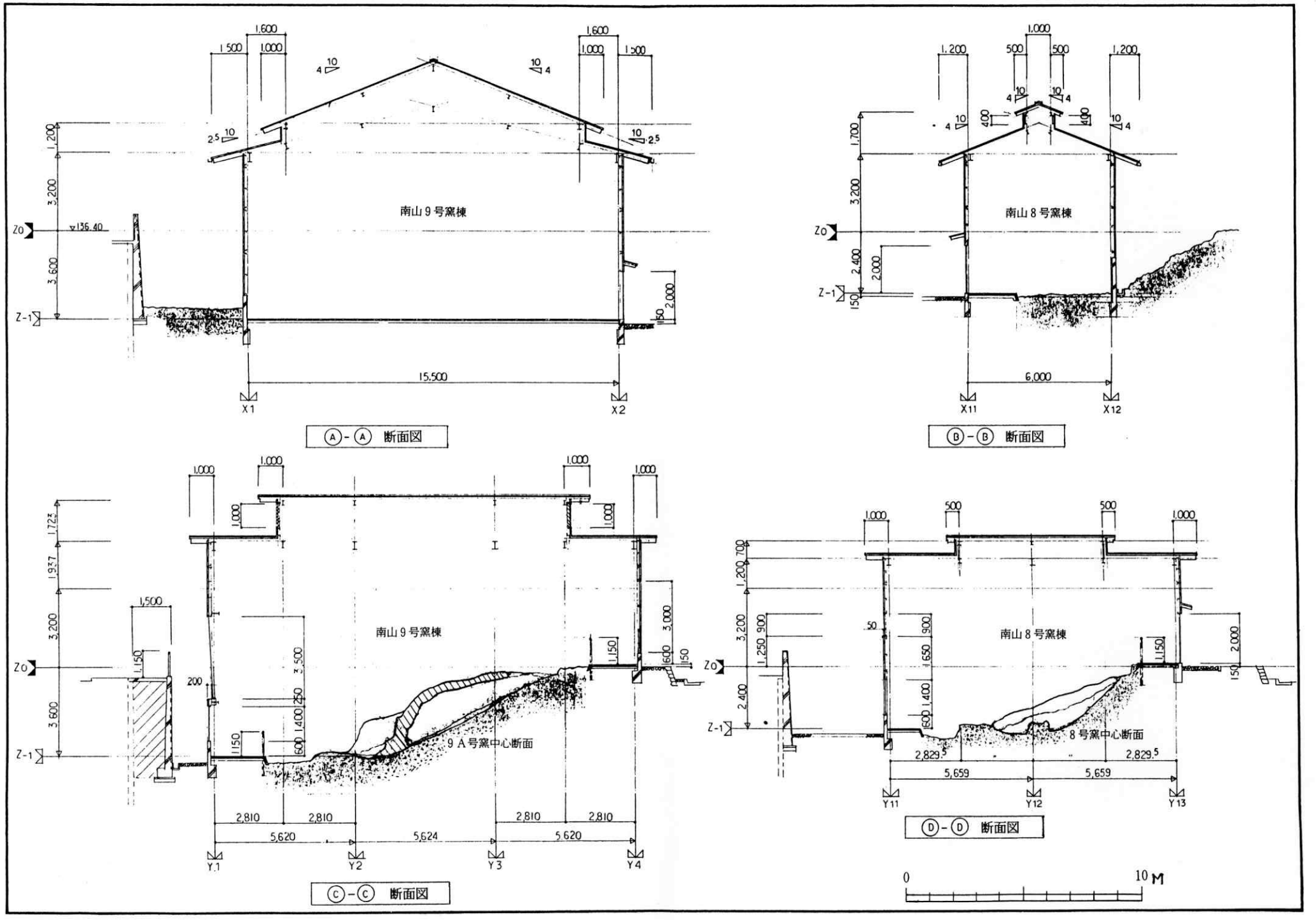


図４　古窯館覆屋と窯体断面関係図

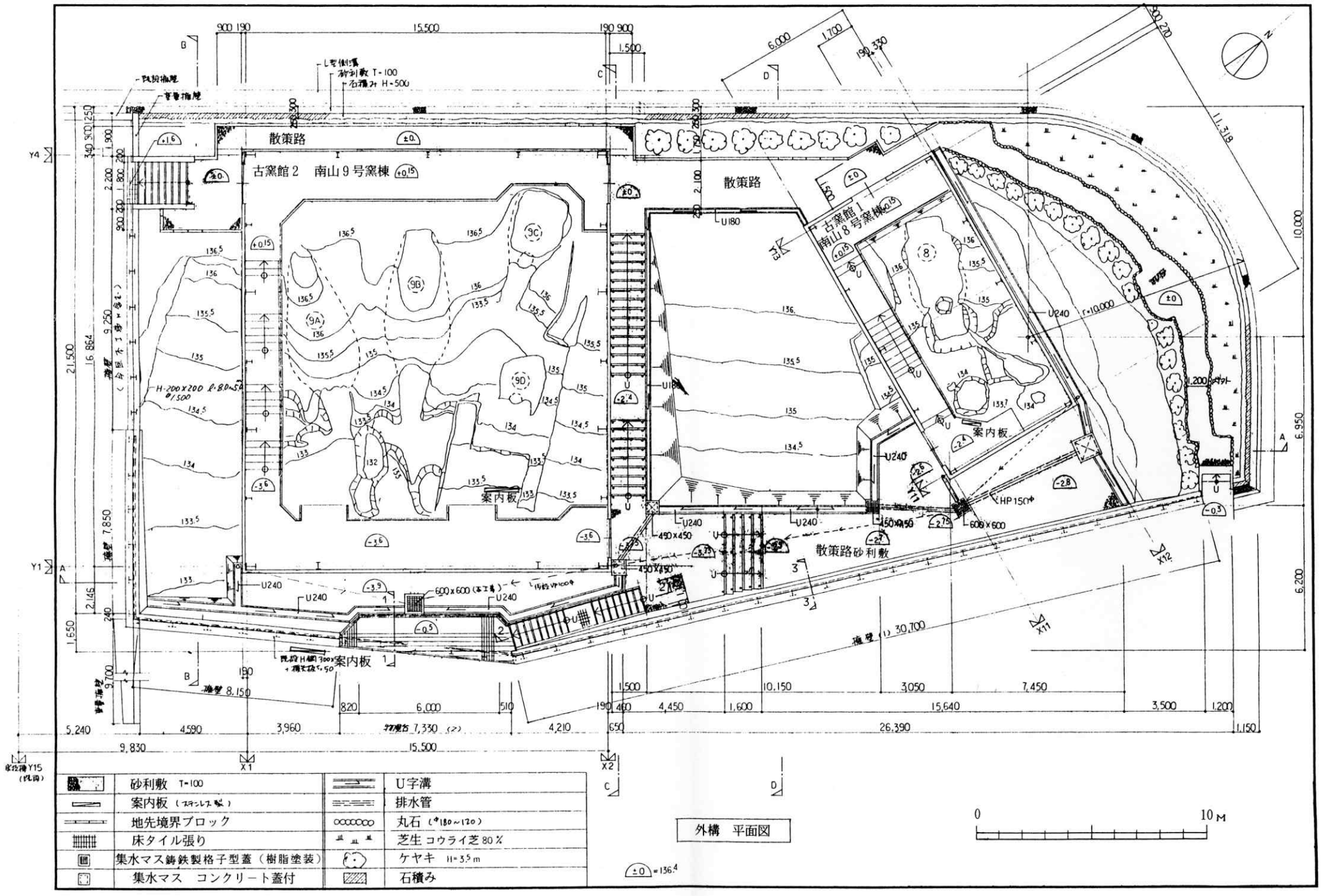


図3　古窯跡と覆屋および外周整備図